

# 本当の民主主義を育てよう

**国民は今、いらいらしている。** 国会議員たちはなぜ協力し合わないのか。復興対策が一向に進まぬ状況に多くの国民がいら立ちを持って見ている。それぞれの主張を言い張るばかりで歩み寄らない。相手のミスあげつらうばかりで、それを修正するための対案を出さない。意見が割れれば、緊急な問題であろうと何も決まらない。決まらない理由はいつも相手のせいだ。自分たちの案を取り入れないと非難しておきながら、取り入れると変節だと責め立てる。反対することにこそ意味がある、と言わんばかりである。

**しかし、よく考えてみると、われわれ自身にもそうしたところが多々ある。** 戦後日本は、戦前の体制を反省し民主主義の形成に力を入れてきた。学校では学級会や生徒会の場を使い、民主主義による合意形成の方法を指導してきた。しかしその実態は「民主主義＝多数決」という一義的なもので、主張された異なる意見について決をとり、多数を得たものが全面的に場を仕切るという形で終わる。意見をすり合わせる、少数意見を取り込むという経験をしてきていないという、そのことが今の国会の状況を生み出しているとも言える。協力しないのではなく、協力して課題に立ち向かうという行動体質が育っていないのである。

**民主主義は**「いかに多くの人々の心を寄り添わせるか」というところに、その真髄がある。「小異を捨てて大同につく」、その上で「大同の中いかに小異を残すか」、ということである。目指すところは同じでも、そこに迫るための考え方・方法論は様々だ。それを闘わせるが、譲れるところは譲り歩み寄り合意を形成していくのが真の民主主義であろう。どうしたら、その方向に向かうことができるのだろうか。

**と、ここで思い出したのが、**水海道小学校（茨城県）の自治活動を描いた「私たちの学校」という50年前の映画である。当時水海道小学校では10の自治活動の部があり、映画はその中の体育部の、ある年の運動会で学年が希望する種目がかちあってしまったために起こる対立を解決するまでの活動を描いている。同小では、運動会の企画運営一切が体育部に任されており、この対立の解決のための活動も、教師はわずかばかりの助言はするが、ほとんどは児童主体で進められる。体育部員たちは双方の学年のクラスにその主張を聞きに行き、それをもとに協議し、上の学年に対し希望する種目を下の学年に譲ってほしいかと交渉する。その代わりに、上の学年に対しては新しい魅力的な種目を提案するのである。背景にあるのは、共通の目標のためにそれぞれが譲り合う、より力のあるものがより多く譲り弱いものを守るという基本姿勢である。

**この映画に描かれた子どもたちの行動、合意形成のために意見を集約しアイデアを出し合い協議し提案し交渉する姿は、民主主義とはこういうものだ**と実感する良い手本だ。50年も前にこうした活動があったのだ。今まさにこれを復活させ、これからの日本を築く子どもたちを育てるとともに、大人たちもぜひ学んで行動に移していきたいものだ。

編集部

JADECニュース85号（2011/10/31）より